

『古今和歌六帖』所収萬葉歌の性格 ―類聚古集「無訓歌」からの検証―

池原 陽齊あきよし

はじめに

『古今和歌六帖』は十世紀後半の成立。おそらく貞元元年(九七六)をそう下らぬ時期に完成したとおぼしき私撰集である¹⁾。その特色を簡潔にしめせば、「約四千五百首を歌題ごとに区分した大規模な私撰集(類題和歌集)」ということになる。本稿では当該歌集の採歌事情を組上に載せるわけだが、その基本事項に関しては、青木太郎の以下のような整理が適切であろう。

所収歌のうち約一一〇〇首が『万葉集』、約七〇〇首が『古今集』、約四〇〇首が『後撰集』と共通する。他に『貫之集』との共通歌が四〇〇首を越え、『躬恒集』や『伊勢集』など私家集との共通歌も多い。勅撰集などの主要歌集だけでなく私家集群にまで目を向けた収集事業がなされたものと思われる。一方で他文献に見出せない歌も約一一〇〇首に及ぶ²⁾。

青木の指摘するとおり、『六帖』は種々の和歌資料からうたを抜き出し、編纂した和歌集とおぼしい。「約一一〇〇首」の出典未詳

歌についても、散佚した文献の少なくない古代文学のこと、現存せぬ典拠のあった可能性は低くあるまい。典拠の搜索とその考証は、『六帖』研究のひとつの、しかも大きな潮流であった。

また研究史を繙くと、『六帖』が『蜻蛉日記』や『枕草子』、あるいは『源氏物語』といった、同時代や後代の作品にどのような影響を与えたのか、この点についても興味³⁾が寄せられてきた。受容・享受の観点である。

端的に言って、『六帖』はその内実以上に、典拠・影響といった周辺の事情に関して多くの研究が蓄積されてきた歌集⁴⁾といってよい。本稿でも、このふたつの研究の潮流のうち、典拠のこと、より具体的には『六帖』約四千五百首の約四分の一の典拠にあたる『万葉集』との関係を検討する。

一 研究史瞥見

『六帖』が『万葉集』から多くの歌を採取していることは、古来周知の事実であつたらう。古い文献に明確な指摘は少ないが、永仁年間(一二九三―九八)、あるいはそれ以前の成立とおぼしき『枕名寄』⁵⁾が「くらはししの山をたかみか夜ごもりに出でくる月の光ともしき」(二八八五)の左注に「右歌万葉第九在之、但末一句、片末難⁶⁾、六帖同之」としめす例などは、『万葉集』と『六帖』にお

なじ歌が存することを知悉しての記述である。いずれも大規模な和歌集であり、偶然見知っていたわけではあるまい。

ただし、本格的に両者の関係が論じられるようになるのは近世以降である。校本を編んだ契沖の研究が嚆矢だろう。契沖は元禄三年（一六九〇）著の『萬葉代匠記（精撰本）』においても、「又六帖に此集より抜出して撰入たる歌尤多し」と、『六帖』の採歌資料に『萬葉集』があったことを指摘し、注釈にも多く（千以上）利用する。

下って文政三年（一八二〇）、「萬葉集を初め次々の書の歌どもをかきあつめたる」という石塚龍磨『校證古今歌六帖』の謂いも、契沖の学説を継承するものである。⁽⁶⁾『六帖』が『萬葉集』から直接うたを採取したという見方は、古くは一般的な理解であった。山田孝雄が『六帖』所収の萬葉歌によって天曆古点がある程度復元できると考えたことも、近世以来の研究史を踏襲した結果といえる。⁽⁷⁾

この流れに大きな転換を迫ったのが老川義治、大久保正の研究である。⁽⁸⁾両者とも、『六帖』所収の萬葉歌が伝誦性を持つことを主張した。今は後者によると、大久保は『萬葉集』の本文と『六帖』所収の萬葉歌に、書写過程での誤写などからは想定しにくい相違のあることなどを指摘し、そのうえで、『六帖』萬葉歌の性格を以下のように規定した（傍線は稿者による）。

六帖歌の供給源として傳承歌の流れを考へなければならぬといふ結論は動かしがたいものであると思ふ。……いはゆる六帖

の萬葉歌の中には、萬葉集から直接採取されたものが大多数ではあらうが、傳承歌を供給源とするものもすくなくならず含まれてゐることを認めねばならぬと思ふ。⁽⁹⁾

右の如く、老川や大久保は、従来は書承が定説化していた『六帖』萬葉歌の典拠について、「傳承歌」というタームを導入した。この理解は平井卓郎、河野頼人らの支持を受け、有力な見方として定着していくことになる。⁽¹⁰⁾青木の比較的近時（二〇〇四年）の概括にも、「万葉集との共通歌については、平安時代の古訓を伝えるとの見方もある一方で、伝誦の一過程を残すとする捉え方もできる」と、書承説と口承説は併記されている。

だが、研究史の根幹にあたる大久保論を「傳承歌」説と単純に解するわけにはいかない。氏は傍線部において、はっきり「萬葉集から直接採取されたものが大多数ではあらう」と述べているからである。大久保は決して『六帖』所収萬葉歌の「大多数」が書承によって生まれたものであることを否定してはいなかった。

また、大久保の「傳承歌」という謂いに関しては、当時の『萬葉集』研究の動向も見合わせる必要があるように思う。大久保論が発表された一九五七年当時は、次の『萬葉集私注』六（一九五二年）の指摘に代表されるように、『萬葉集』の作者未詳歌を「民謡」、つまりは口承歌と見做すことが少なくなかった。

此の卷第十一、及び卷第十二は、卷第十四の東歌と共に、集中

の代表的な民謡集と見てよい。巻第七以降見え来った作者未詳の諸作は、多くは民謡と見なして差支ないものであらうが、民謡としての性格を最もはつきりと具へたものは上記三巻と見ることが出来る。

ほぼ同時期（一九五六―五七年）に刊行された『増訂・萬葉集全註釋』にも、「この歌は、民謡として流布していたらしく」（巻三・三八五）、「これも民謡性の歌であつたものと推察される」（巻三・四三七）というような文言が散見している。

しかし、『萬葉集』の研究史を追っていけば、『私注』が「代表的民謡集」とみとめた巻十一・十二の両巻は、一九六五年には、森脇一夫によって「天平期の著名歌人もしくは、その周辺の有名無名歌人の名が忘佚されて、巻十一・十二の資料となつたもの」と認定されるに至る。『遊仙窟』の受容など、巻十一・十二のうたが中下級官人層の創作歌であることを豊富な例をもつてしめした森脇論は、以降の研究の指標になつた説といえる。⁽¹³⁾

その一方で、『六帖』所収の萬葉歌の性格といった問題は、一九六〇年代半ば以降、少なくとも『萬葉集』研究の側からは、あまり組上に載せられなくなつていく。もちろん河野の研究は七〇年代初頭まで下るが、傾向としてはそのように把握して誤るまい。

つまるところ、萬葉歌の口承性に疑義が呈される六〇年代半ば以降の通説的研究は、『六帖』萬葉歌の出典の是非にはまつたくと言つ

てよいほど影響をあたえなかつた。『萬葉集』研究の進展が反映されず、大久保論が踏襲されてきた感がなくもないのである。

また、平安時代における『萬葉集』の訓読についても、「萬葉集」時代の語彙・語法を復元することによつてではなく、歌意に大きな変化を来さない範囲で、漢字本文の方を犠牲にする」方針があつたこと、小川靖彦によつて詳細な検証がなされている。⁽¹⁵⁾ 平安時代前期における萬葉歌訓読の性格が逐語的ではなかつたのなら、そもそも『六帖』所収の萬葉歌が『萬葉集』の漢字本文に即応しないことを理由に、伝誦の産物と捉えること自体が妥当かどうか。この点にも少なからぬ問題がある。

萬葉歌が伝誦され、『六帖』編纂された十世紀後半の時分まで命脈を保つたか否か、『萬葉集』本文との相違を即口承歌撰取の根拠とすることが可能かどうか、『六帖』萬葉歌の典拠の理解については、再考の余地が生じているといえよう。

二 本文異同の諸問題

とはいふものの、老川や大久保、あるいは上田英夫⁽¹⁶⁾らが指摘するとおり、『萬葉集』の本文（あるいは『萬葉集』写本の附訓）と、『六帖』所収萬葉歌の本文とのあいだに埋めがたい溝が存することも事実である。訓表記と音仮名表記の例を一首ずつしめす。

①『萬葉集』卷十・二一五六／『六帖』第二・九四八

足日木乃 山之跡陰尔 鳴鹿之 聲聞為八方 山田守酢兒

秋はきにしからみかけて鳴く鹿の 声き、つ、や山田もるらん

②『萬葉集』卷十四・三三九七番歌／『六帖』第二・一二六四

比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許曾 比氣波多延須礼

阿杼可多延世武

ひたちなるあさかの浦のたまもこそ ひけはねたゆれわれはた
えせし

①の場合、初句については誤写などを想定できなくもないが、第二句と結句は異なりが著しい。別途理由を考える必要がある。

②は一字一音の例であるから、訓むに際して困難があったとは思われないが、異同が存する。二句の「奈左可」と「あさか」は「な(奈)」と「あ(阿)」の誤写の可能性を指摘しうるであろうが、結句の相違はそれで済みそうもない。なお元暦校本では、当該二首は以下のように施訓されている。

①あしひきのやまのとかけになくしかの 声き、つやもやまた
もるすこ

②ひたちなるなさかのうみのたまもこそ ひけ^はたえすれあと
かたえせぬ

①の結句「もるすこ」は日本語として意味が通じにくい（現行訓は「もらすこ」）が、「守酢兒」という漢字本文には対応する。②の

下二句も抹消こそなされているものの、やはり萬葉歌の表記に即した訓である。六帖歌との距離は明白といえる。

このような例を見ると、『六帖』所収の萬葉歌を書承の産物と見做す近世以来の見方に疑問が寄せられ、口承歌の採取という説が提示されたこと自体はよく理解できる。

しかし、この見方は『六帖』という歌集の性質を十分に吟味していないきらいがある。より具体的にいえば、本文に関する問題がややもすると等閑視されてしまっている。

まず注意すべきは『袋草紙』に「六帖、和歌四千六百九十六首」と記されていることである。この歌数は、現存諸伝本の約四千五百首と一致しない。少なくとも、平安時代後期に清輔の目にした『六帖』は現存伝本とはいくらか系統を異にしていたと考えられる。

この相違を裏付ける資料として、古筆切がある。『六帖』には平安時代中期から鎌倉時代後期頃までの古筆切が二十葉七十首ほど紹介されており、その本文には写本との異同が少なくない。¹⁷ 写本とは排列の異なる切もあり、我々が目にできる『六帖』伝本の本文は、往時を反映しない一面があるといえる。

そもそも、現存伝本中の最古写本は文禄四年（一五九五）書写の永青文庫本と、書写年代が下る。しかも、この永青文庫本や、近世初期写の桂宮本の第一帖書写奥書は「いづれもくみなかくのみしどけなき物にて侍れば、本のま、にしるしをく。のちに見ん人、心

えさせ給べし」と本文の缺陷を指摘する。この書写奥書は嘉祿二年（一二二六）に源家長が記したもので、定家本を転写した折の感慨である。鎌倉時代初期の定家本段階において、『六帖』の本文は信頼が置けないと見做されていたことが知られる。

このような『六帖』の本文事情をかんがみると、「桂本と六帖の不一致は大いに期待に背くもの」と『六帖』本文が『萬葉集』に即して「不純」であることを難じた平井の発言に対する福田智子の次のような指摘には、傾聴の価値があるように思う。

しかし、翻って考えてみると、幾度となく書写を繰り返す、伝来してきた写本について、その作品全体を貫くような書承関係や引用関係が簡単に見出されることは、きわめて稀であると言つてよいであろう。だとすれば、部分的にせよ、他の作品との関わりの片鱗を見出すことに、まず努めるべきであろう。¹⁹⁾

石田穰二の本文校訂に関する「源氏物語の青表紙本についても、枕草子の三巻本についても、ある一本の忠実な翻刻で読むに堪へる本文になり得るような本は存在しない²⁰⁾」との発言が想起される。誤写・意改など、種々の理由で変遷していく古典本文について、逐一の瑕疵を検討してみても——少なくともこの点にのみ執着することによって——、十分な成果が得られるとは考えにくい。

まして、『萬葉集』と『六帖』は別の作品であり、漢字本文をどう訓むかという問題も介在する。小川が指摘するように、平安時代

前中期の萬葉歌の訓読がかならずしも逐語的ではなかったらしきことをも念頭に置かならば、個々の本文の相違にのみ拘つてみても、あまり生産的とはいえない。『萬葉集』が、萬葉歌がどのように『六帖』に取り込まれたのか、この点を解明するためには、もう少し、異なる方向から切り込んでいく必要があるようだ。

たとえば、「万葉集で隣り合はせの二首（時に三首）がそのままの順序で六帖にも出てゐる箇所が少なくない」と、『萬葉集』と『六帖』の排列の一致に着目した上田の研究のような、一首一首のレベルを超えた、広汎を対象とする検討が求められるように思う。上田は排列から切り込んだわけだが、本稿では、それとも異なる観点から『六帖』所収萬葉歌の性格をあきらめたい。

三 『六帖』編纂と『萬葉集』訓読の時期

それでは、どのような観点を導入すれば、『六帖』所収の萬葉歌の性格の、少なくともその一端をあきらかにできるだろうか。ある程度、仮説を提示していくしかないわけであるが、まず肝心な点として、『六帖』の編纂時期との関連を考えたい。

冒頭に述べたように、『六帖』の完成は貞元元年をそう下らぬ時期と判断できる。天徳年間（九五七―六一）には一定の規模の歌集ができあがっており、限られた範囲の層には利用されていた可能性

がたかいという山岸徳平以来の理解²²もあるが、この点を加味してもよい。そのうえで、『萬葉集』との関連において、つぎの事情は無視しないようにおもう。

それは、『六帖』が編纂されたとおぼしき天徳・貞元の直前に、天曆古点の事業がなされ、『萬葉集』の大半のうたに訓が附されたという事実である。天曆古点の事業は天曆五年（九五二）にはじまり（『禁制撰和歌所闕入文』『本朝文粹』卷第十二）、諸説あるが、遅くとも天曆十年（九五六）には終局したとおぼしい²³。

なお、天曆古点以前にも、『萬葉集』に訓が附される場合のあったことについては、『和名類聚抄』の出典注記に即した築島裕の考証²⁴がある。築島説に関しては、近時、山田健三が具体例を検証しての追認もおこなっており²⁵、説得性を持つ。『六帖』編纂の十世紀後半のころ、訓をともなった『萬葉集』が複数存在していた蓋然性はそうとうに高いといえよう。

十世紀後半から十一世紀前半には、『六帖』のほか、『拾遺和歌集』や『人麿集』、『赤人集』、『家持集』など、多量の萬葉歌を採取する歌集が多く編まれている。この現象も、『萬葉集』の可読性が高まったこと、つまりは訓が附されたことと無縁ではあるまい²⁶。

以上のような事情を考慮するならば、『六帖』所収萬葉歌の性格を考えるにあたっては、『萬葉集』の附訓との関係の検証が欠かせないということになる。もちろん、従来から写本の訓、とりわけ次

点本の訓と『六帖』との関係は注目されてきた。というよりも、『六帖』萬葉歌の検証にあたっては、かならずといってよいほど次点本との関係が取り沙汰されてきたといつてよい。

ただ、これまでの研究で蓄積されてきたのは、次点本の訓と『六帖』の一致・不一致、つまりは個々の歌に即しての検討である。もちろんこの検討は重要なのだが、本稿では、もう少し鳥瞰的な視点から、附訓と『六帖』の関係を検証する。

四 『萬葉集』伝本の「無訓歌」

本稿では、「無訓歌」という観点から『六帖』萬葉歌の性格の一端をしめしたい。「無訓歌」は、文字どおり訓の附されていない萬葉歌をさす。よく知られるとおり、『萬葉集』の全歌に訓が附されたのは仙覚の新点段階であり、それ以前、つまり次点本の段階では、長歌を中心に訓を附されなままのうたが存していた。

さらに田中大士が論証したとおり、次点本も二種に区分することができる²⁷。長歌にほとんど訓を附さない平仮名別提訓本と、一定の長歌に訓を附す片仮名傍訓本である。当然ながら、附訓の少ない平仮名本の方が先行する系統とみとめられる。この先後関係は、現存最古写本の桂本をはじめ、藍紙本、元暦校本、類聚古集など平安時代書写の写本がいずれも平仮名訓本、鎌倉時代以降の廣瀬本や春日

本などが片仮名訓本であることと呼応する。

つまり『六帖』編纂段階の『萬葉集』は、ひらがなの訓を附した可読性の高いうた（多数）と、低い無訓のうた（少数）が併記されていたわけである。そのような時代において、歌集編纂者が『萬葉集』からうたを採取するとすれば、読むことの容易な附訓歌を優先して抜き出す可能性が高い——そう考えることは、さほど不自然ではないように思う。

そして、もし『六帖』が附訓歌に偏して採歌をおこなっていることがみとめられるならば、『六帖』は附訓本の『萬葉集』を藍本のひとつとして利用した可能性の-highいことが了解されよう。以下では実際に平仮名訓本の無訓歌と『六帖』所収の萬葉歌とを対照し、この仮説の是非を確認したい。

ただし、比較対象となる平仮名訓本にはいくつかの伝本があり、そのすべてを検討することは紙幅の面から行論上からも困難である。そのため、今回は類聚古集との比較にしぼって検討する。

類聚古集を選択する理由は、この本が平仮名訓本のうち、もっとも歌数が多いためである。現存する次点本は零本のみだが、その中で類聚古集は約三千八百首をとどめている。ついで多いのは元暦校本であるが、約二千六百首と、残存する歌数は三分の二程度に過ぎない。この点を考慮すると、類聚古集が文字どおり類纂本、つまり『萬葉集』の排列を違えた特異な伝本であるという難点を差し引い

ても、平仮名訓本の附訓状況を確認するにあたって、もっとも適切な検討対象であると考えられる。

そこで、以下では該本と『六帖』とを比較し、附訓歌・無訓歌が『六帖』にどのようなかを検討する。なお、検討に際しては短歌のみを対象とする。『六帖』に『萬葉集』所収の長歌は四首、旋頭歌は十首しか取られておらず、統計の対象として有意な材料とは考えにくいためである。如上の判断にもとづき、以下の歌数や歌番号は、すべて短歌を対象としている。

五 類聚古集無訓短歌と『六帖』の採歌状況

類聚古集所収の無訓短歌の『六帖』所収状況を一覧としたものが次ページの表1である。「巻」と「番号」は『萬葉集』の巻数と国歌大観番号を、「六」は『六帖』所収の有無をしめす。

さて、類聚古集無訓短歌の総数は六十七首。そのうち、「六」の項目が「×」となっている六十首は、『六帖』に採られていない無訓の短歌である。無訓歌が採られない傾向はみとめうる。

しかし、「○」となっている例外が七首も存するという事実は、『六帖』の採歌資料は附訓本の『萬葉集』であるため、無訓歌を採らない傾向がある」という結論を導くためにはいかにも多い。この七首については別途検討する必要がある。

表1・類聚古集の無訓短歌と『六帖』所収歌一覧

卷	番号	六	卷	番号	六	卷	番号	六
11	2443	×	9	1731	×	1	9	×
11	2457	×	9	1739	×	1	19	×
11	2481	×	10	1849	×	1	53	×
11	2647	×	10	1876	○	2	128	×
11	2853	×	10	1885	×	2	156	×
12	2859	×	10	1936	×	3	249	×
12	3132	×	10	1974	○	3	337	×
13	3341	×	10	1996	×	5	893	×
13	3342	×	10	1998	×	5	900	×
13	3343	×	10	2004	×	6	1052	×
16	3810	×	10	2005	×	7	1113	×
16	3846	×	10	2011	×	7	1137	×
16	3847	×	10	2012	×	7	1209	×
16	3871	×	10	2019	×	7	1216	×
17	3958	×	10	2091	×	7	1302	○
18	4079	×	10	2106	×	7	1308	×
19	4205	○	10	2108	×	7	1387	×
19	4206	×	10	2127	×	7	1414	○
19	4212	×	10	2156	○	8	1464	×
20	4417	×	10	2217	×	8	1628	×
20	4514	×	10	2241	×	9	1698	×
			10	2302	×	9	1709	×
			10	2348	×	9	1718	○

この七首のうち、巻七・一三〇二番歌、巻十・一九七四番歌、同二一五六番歌の三首については、いずれも元暦校本では訓が附されている点に注目してよいように思う。

というのも、元暦校本は十一世紀後半、類聚古集は十二世紀初頭の書写と目され、前者がより古い段階の附訓状況をとどめる可能性が高いのである。少なくとも、平仮名訓本段階においてこの三首が無訓歌でなかったことはたしかといえる。訓の書き損じなど、類聚古集の側になんらかの問題があったと判断しうる。

ついで巻七・一四一四番歌は、類聚古集第十四の「卷末歌」であるが、以降が明らかに落丁している³⁰。類聚古集は漢字本文の左にひらがなの訓を書く形式であるから、落丁に訓が存した蓋然性は決して低くない。当該歌は、残念ながらほかの平仮名訓本には伝わらないため確証を缺くものの、しかし、片仮名本の廣瀬本と紀州本でも附訓歌であることを考慮するならば、平仮名本段階でも無訓歌ではなかったのではあるまいか。

おなじく巻十・一八七六番歌も現存の平仮名訓本に残らない。精確には、元暦校本に断簡として残るうたで、訓はつたわらないのである。そのため、次善の策として片仮名本を見ると、やはり廣瀬本と紀州本はいずれも訓を有している。資料が不足しているため論証しきれないうらみはあるが、やはり、平仮名訓本段階において訓の存した可能性は想定しうるように思う。

後の二首、とくに最後の一首の認定にはやや問題を残すが、以上五首については、平仮名訓本総体として見た場合、無訓歌とはいえない可能性が高い。類聚古集、あるいはその前身の敦隆本になんらかの瑕疵があったと判断する方が妥当であろう。

しかし、残りの二首（巻九・一七一八番歌、巻十九・四二〇五番歌）を同様に解することは不可能である。二首いずれも片仮名本である廣瀬本にすらも訓が附されておらず、しかも西本願寺本や京都大学本の訓が朱で書かれているから、仙覚新点歌とおぼしい。

もつとも、前者は卷十までが次点本である紀州本の附訓歌であるから、仙覚以前に訓が附されなかったわけではない。仙覚の目にした本には訓がなかったというに過ぎないであろう。とはいっても、類聚古集・廣瀬本がともに無訓である以上、『六帖』編纂時分に当該二首に訓が附されていた可能性が低いことも間違いない。

しかし、この二首が口承歌として『六帖』に流入した可能性はきわめて低い。書物としての『萬葉集』から直接抜き出されたであろうことは、その排列が指示している。

③ 『萬葉集』卷九・一七二八、一九

高市の歌一首

率ひて漕ぎ去にし舟は 高島の阿渡の湊に泊てにけむかも

春日蔵の歌一首

照る月を雲な隠しそ 島陰に我が舟泊てむ泊まり知らずも

④ 『六帖』第三・一八〇九、一〇

たかふちのわうじ

あし、とてこき行く舟は たかしまのふしをのみちにつきにけるかな

てる月をくもなかくしそ しまかけに我が舟よせんとまりしらすも

⑤ 『萬葉集』卷十九・四二〇四、〇五

攀ぢ折れる保宝葉を見る歌二首

我が背子が捧げて持てるほほがしは あたかも似るか青き蓋

講師僧恵行

皇祖の遠御代御代はい敷き折り 酒飲むといふそこのほほがしは

⑥ 『六帖』第六・四三〇五、〇六

わかせこかさ、けてもたるほ、かしは あたにもるかあをきかさには

すべらきのとほにみよくはやふせり さけのむといふそこのほ、かしは

③と④、⑤と⑥がそれぞれ対応する。『六帖』と『萬葉集』とがまったく同じ排列であることは一目瞭然だろう。上田が「万葉集で隣り合はせの二首……がそのままの順序で六帖にも出てゐる」と指摘した例である。同種の例が『六帖』には三十七組八十一首とかなり多量にみとめられる。この点を考慮するならば、当該二例については『六帖』編者が『萬葉集』から、いずれも二首まとめて抜き出したと考えてよいであろう。ことに⑥は、この二首のみが「ほほかしは」と題におさめられており、題とうたが連動しているとおぼしい。萬葉歌あつての題と見ることができそうだ。

このように例外の七首の内実を確認していくと、五首は類聚古集においては無訓であるものの、それは同集の問題で、平仮名本段階においては訓が附されていたと見られる。残り二首は平安時代にお

いて無訓歌であったと見做すべき例であるが、口承歌ではなく、『萬葉集』から直接抜き出されたと判断しうると結論できる。

六 『六帖』の萬葉歌採取率と類聚古集無訓歌

さて、前節での検証によれば、類聚古集無訓歌六十七首のうち六十首は『六帖』に採られておらず、残り七首中五首については、平仮名本総体として見た場合、無訓歌でない可能性の高いことが確認できた。それでは、この数字はどの程度有意であるのか、『六帖』全体の萬葉歌採取率・採取率から検討する。⁽³³⁾

表2・六帖の『萬葉集』短歌採取率

	萬 歌 数	六採 取 数	採取 率	類聚古集 無訓歌
卷1	68	10	15%	3
卷2	131	45	34%	2
卷3	229	69	30%	2
卷5	104	2	2%	2
卷6	132	19	14%	1
卷7	324	131	40%	8
卷8	236	88	37%	2
卷9	125	52	42%	5
卷10	532	207	39%	21
卷11	480	248	52%	5
卷12	383	32	8%	2
卷13	60	13	22%	3
卷16	92	17	18%	4
卷17	127	10	8%	1
卷18	97	0	0%	1
卷19	131	39	30%	3
卷20	218	27	12%	2
	3469	1009	29%	67

この表2は、『六帖』所収の萬葉短歌の採取数及び採取率を一覧

としたものである。ただし卷四・十四・十五については、類聚古集に無訓歌が存しないため、この三巻をのぞき、十七巻分の短歌数を提示した。

『萬葉集』十七巻の短歌数三四六九首に対して、『六帖』所収歌は一〇〇九首ある。この数は、萬葉短歌の約二十九パーセントに相当する。つまり、十七巻の短歌のうち、四首に一首以上が六帖に採られている計算となるわけで、無訓歌がごとく入集から洩れているのは、偶然の産物とは考えにくいのではないか。

もちろん、卷六のように無訓歌が一首しかない、あるいはそもそも『六帖』が萬葉歌を採取しない卷十八など、とても有意な数字とは見做せない巻も存する。しかし、卷七・卷九・卷十・卷十一のように採歌数が多く（採取率が高く）、無訓歌も複数存在する巻⁽³⁴⁾については、「無訓歌を避けている」傾向が看取しえるだろう。

ことに卷十については、全五三二首の短歌のうち、四割に近い二〇七首が『六帖』に採られているにも関わらず、二十一首もの無訓歌はことごとく入集から洩れている。偶然で片付けるには偏った数字といってしまうのではないか。可読性の高い附訓歌を優先して採るという『六帖』の方針が垣間見える。

ただ、このように推定していくと、二首とはいえ無訓歌が採られることはやはり問題である。最後にこの点を検討しておきたい。

まずは『六帖』が類題歌集、つまりは題に即してうたを蒐集・分

類する歌集だという点は注意してよいだろう。ある題を設定して、それに即するうたが見当たらない場合には、無訓歌であっても採らなければならぬ、そのような事情は想定しうる。

しかも前述のとおり、「ほほかしは」の題には『萬葉集』の二首（四二〇四、〇五）しかおさめられていない。となると、附訓歌の四二〇四番歌を採った際、「攀ぢ折れる保宝葉を見る歌二首」という題詞のもとに排されている点が顧慮され、合わせて無訓歌の四二〇五番歌も抜き出したと考えることは容易である⁽³⁶⁾。

一方、もう一首の一七一一八番歌については、同題の事情を想定することは困難である。排列からみて『萬葉集』から抜き出されたことはたしかであろうが、当該歌は、一七一五番歌から一七一九番歌までの「〜歌一首」との題詞を添えて並べられているうちの一首に過ぎない。「攀ぢ折れる保宝葉を見る歌二首」のような題詞の拘束性は存在しないわけである。

この五首がすべて『六帖』に採られているわけでもなく、また当該歌をふくむ「ふね」の題には二十八首（一八〇三〜三一）ものうたが存し、無理に無訓歌を採る必然もみとめがたい。附訓歌とセツトで採られていることは事実なので、「無訓歌だけを選んで抜き出した例がない」とはいいうるが、無訓歌を採る積極的な理由とはいえないであろう。

この一七一一八番歌の採歌事情については、遺憾ながら不明という

ほかない。ただ、四二〇五番歌もふくめて、無訓の萬葉歌を採取している以上は、「附訓がない」＝「読めない」というわけではなかったであろう。となると、附訓歌を採る理由は、可読性もさることながら、天曆古点という国家事業への敬意もあったのかなど、憶測できることは少なくない。

ただし、これ以上は推測に推測を重ねることになる。六十七首の類聚古集無訓歌を検討し、うち六十六首について、一定の傾向を見出すことができたことを確認するにとどめ、考証を終えたい。

おわりに

平仮名訓の附された次点本のうち、もつとも多くの歌数をとどめる伝本は類聚古集である。その所収無訓歌の『六帖』への採取状況を確認することで、『六帖』が附訓本の『萬葉集』からうたを抜き出した蓋然性の高いであろうことを述べきった。この検証結果は、口承された「萬葉歌」が『六帖』の典拠であるとの考えかたを見直す一石となるように思う。

そもそも『六帖』の典拠については、青木が「勅撰集などの主要歌集だけでなく私家集群にまで目を向けた収集事業がなされた⁽³⁷⁾」と述べ、さらに定数歌や歌合資料、屏風歌にまでおよんでいるらしきことも指摘されている⁽³⁸⁾。『六帖』編者は種々の和歌資料を蒐集して

いたとおぼしく、書承による入集を基本に考えるべきであろう。

今後の展望についても簡潔に述べておきたい。おなじく平仮名訓本の元暦校本の調査は必須である。片仮名本ではあるが、巻十後半の落丁をのぞけば完本に相当する廣瀬本についても同断である。これらの伝本の附訓状況と『六帖』を対比することによって、本稿でしめした傾向に妥当性がみとめうるか否かを、より詳細に検討しなければなるまい。

『萬葉集』諸伝本の検証によって、次点本と『六帖』との関係を少しでも明確にすることが当座の目標ということになる。この点を申し述べて本稿を終える。大方のご批評を仰ぎたい。

注

- ① 後藤利雄「古今和歌六帖の編者と成立年代に就いて」(『國語と國文學』第三十卷第五号・一九五三)
- ② 青木太朗「古今和歌六帖」(『和歌文学大辞典』古典ライブラリー・二〇一四)
- ③ 品川和子「蜻蛉日記における方法と源泉」(『蜻蛉日記の世界形成』武蔵野書院・一九九〇、初出一九六七)、紫藤誠也「古今和歌六帖と和漢朗詠集」(『和歌文学研究』第二十六号・一九七〇)、同「古今六帖で読む源氏物語『若紫』」(『中古文学』第九号・一九七二)、西山秀人「枕草子類聚章段における古今和歌六帖の受容…地名章段を中心に」(『古代中世文学論考』第二集・一九九九)など。
- ④ 平田喜信「作品としての古今和歌六帖…古今集との関係をめぐって」(『横浜国大…国語研究』第三号・一九八五)や、青木「古今

和歌六帖』の配列をめぐって…編纂意識の一側面」(『和歌文学研究』第八十三号・二〇〇一)、あるいは近時の田中智子「古今和歌六帖『雑思』の配列構造…古今和歌集恋部との比較を中心に」(『中古文学』第一〇一号・二〇一八)のように、『六帖』自体の排列・構造を論じた研究も存するが、傾向としては以上の二種に大別できよう。樋口百合子「裏書注から見た成立」(『歌枕名寄』伝本の研究…資料編和泉書院・二〇一三、初出二〇一〇)

⑥ 田林義信編『校證古今歌六帖』上(有精堂・一九八四)。「難波の契沖の大人此事に深く心をいれて此書(『六帖』)にのれる古書の歌どもをあまねく考へ出て歌どものかたはらにしるしおかれたる」云々というのは、契沖の校本に対する評言であろう。

⑦ 山田孝雄「萬葉集と古今六帖」(『萬葉集考叢』寶文館・一九五五、初出一九五二)

⑧ 老川義治「古今和歌六帖と万葉集…人麿訓点篇」(『国語国文研究』第九号・一九五六)、大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」(『萬葉の伝統』塙書房・一九五七、初出同年)

⑨ 前掲(8) 大久保

⑩ 平井卓郎「古今和歌六帖の研究」(明治書院・一九六四、パルトス社復刻版(一九九一)による)、河野頼人「萬葉歌の伝誦…古今和歌六帖にみられるその類型の指摘をめぐって」(『上代文学研究史の研究』風間書房・一九七七、初出一九七二)

⑪ 青木「古今和歌六帖」(『平安文学研究ハンドブック』和泉書院・二〇〇四)

⑫ 森脇一夫「万葉集卷十一・十二作歌年代考…天平歌人の作とその類歌とに關連して」(『語文』第二十輯・一九六五)

⑬ 中川幸廣「万葉集卷十二試論…その作者の階層の検討を通して」(『語文』第二十二輯・一九六五)、久米常民「路行人事告無」の

- 訓釈について」(『美夫君志』第八号・一九六五)、神野志隆光「万葉集卷十一、十二覚書」(『学大國文』第二十三号・一九八〇)など。
- (14) 前掲(10)河野
- (15) 小川靖彦「天曆古点の詩法」(『萬葉学史の研究:初版二刷』おうふう・二〇〇八、初出一九九九)
- (16) 上田英夫「古今和歌六帖と萬葉集訓点」(『萬葉集訓点の史的研究』塙書房・一九五六)
- (17) 拙稿「『古今和歌六帖』古筆切本文・写本文対校稿:附古筆切本文一覽表」(『日本文学文化』第十八号・二〇一九)
- (18) 久曾神昇『私撰集殘簡集成』(汲古書院・一九九九)
- (19) 福田智子「『古今和歌六帖』と嘉曆傳承本『万葉集』:『万葉集』の訓の生成と流布について」(『社会科学』第一〇二号・二〇一四)
- (20) 石田穰二「ことばの世界としての源氏物語」(『源氏物語攷その他』笠間書院・一九八九、初出一九七七)
- (21) 前掲(16)
- (22) 山岸徳平「平安時代の文学と萬葉集」(『萬葉集講座』第四卷・春陽堂・一九三三)、近藤みゆき「『古今和歌六帖』の「歌ことば」」(『古代後期和歌文学の研究』風間書房・二〇〇五、初出一九九九)など。
- (23) 熊谷直春「秘閣における源順:後撰集と古点作業完成の時期」(『平安朝前期文学史の研究』桜楓社・一九九二、初出一九七二)。山口博「後撰和歌集の成立」(『王朝歌壇の研究』村松道典櫻楓社・一九六七、初出一九六三)や新大系『後撰和歌集』の解説(片桐洋一)は天曆七年(九五三)を終局とみる。今は確実な下限とみて熊谷説によった。
- (24) 築島裕「万葉集の古訓点と漢文訓読史」(『著作集』第二卷・汲古書院・二〇一五、初出一九七二)
- (25) 山田健三「和名抄にみる古点以前の万葉集」(『萬葉集研究』第三十七集・二〇一七)
- (26) この点は、拙稿「『新撰和歌』の万葉歌:「弘仁より始めて」は何を意味するか」(『日本文学研究ジャーナル』第五号・二〇一八)でも検討した。
- (27) 田中大土「長歌訓から見た万葉集の系統:平仮名訓本と片仮名訓本」(『和歌文学研究』第八十九号・二〇〇四)
- (28) 小川編『萬葉写本学入門:上代文学研究法セミナー』(笠間書院・二〇一六)
- (29) 稲岡耕二編『万葉集事典』(學燈社・一九九四)のように書写年代を明示しない場合も多いが、元曆校本を先、類聚古集を後と見做す点に相違はない。
- (30) 佐竹昭広ほか編『校本萬葉集・新增補版』一(岩波書店・一九八二)に指摘があり、影印でも判別がつく。
- (31) 前掲(16)
- (32) 前掲(16)を踏まえて稿者が再度確認した数字であるので、上田とは認定数が異なる。具体的な歌番号については、口頭発表「『古今和歌六帖』所収「人麻呂歌集略体歌」の性格:次点本との関係から」(平成三十年度上代文学会大会、於皇學館大学)で提示した。近日中に文章化する予定である。
- (33) 『六帖』所収の萬葉短歌の数については、中西進「古今六帖の万葉歌」(武蔵野書院・一九六四)、渋谷虎雄『古文萬葉和歌集成:平安・鎌倉期』(桜楓社・一九八二)を参照し、独自に判断した。
- (34) 当該四巻のみで計算すると、萬葉短歌一四六一首に対し、『六帖』所収歌は六三八首、約四十四パーセントにもぼる。その一方で、無訓歌も三十九首と多く、巻九の一首(一七一八)を除けば『六帖』には採られていない。
- (35) そもそも「ほほかしは」の平安朝和歌の用例は「和歌&俳諧ライ

ブラリー」で検索するかぎり、『六帖』の二例しかない。特異な歌語であつたらしく、『六帖』編者が『萬葉集』を閲したことによつて作られた題とも考えうる。

(36) 一七一六番歌は『六帖』に入集していない。また一七一五番歌は『六帖』の四四〇番歌、一七一七番歌は同一五七五番歌と、当該二首とは排列も離れている。

(37) 前掲(2)

(38) 青木「『古今和歌六帖』と「重之百首」」「六帖」の撰集資料をめぐって」(『横浜国大・国語研究』第十五号・一九九七)、西山「源順歌の表現」(『古今和歌六帖』出典未詳歌との関連」(『和歌文学研究』第七十六号・一九九八)、田中智子「源順の大饗屏風歌」(『古今和歌六帖』の成立に關連して」(『國語と國文學』第九十二卷第二号・二〇一五)など。

※各作品の本文は以下のとおり引用した。

- ・『萬葉集』……木下正俊校訂『萬葉集CD-ROM版』(塙書房・二〇〇一)。
- ・適宜『校本萬葉集』を参照した。なお類聚古集に關しては、小島憲之編『類聚古集』(臨川書店・一九七四)、秋本守英『類聚古集』(思文閣出版・二〇〇〇)も参照した。
- ・『古今和歌六帖』……「新編国歌大観」。宮内庁書陵部『図書寮叢刊』古今和歌六帖』上卷(養徳社・一九六七)も参照した。
- ・『歌枕名寄』……「新編国歌大観」。樋口『歌枕名寄』伝本の研究』も参照した。
- ・『萬葉代匠記』……「契沖全集」(岩波書店)
- ・『袋草紙』……「新日本古典文学大系」

【附記】

本稿は第十五回万葉古代学公開シンポジウム「万葉集をよんだ人々」

人々のよんだ万葉集」(二〇一八年九月二十二日、於奈良県立万葉文化館)の発表成果にもとづく。

発表当日、廣岡義隆から「勅撰事業によってまとめられた天曆古点本を、六帖編者は容易に利用できたのか」という趣旨のご指摘をいただいた。この点については、梨壺の五人のひとりである源順を『六帖』編者に擬す説との関係なども考慮に入れて、なお検討せねばなるまいと考えている。本稿では、ご指摘を十分に生かすことができなかつた。

なお、敬称を略したのは氏名のあとに「氏」を付けることに違和を覚えるため、他意はない旨、申し添える。